

平成24年9月24日

平成24年度 管内学校安全推進会議に参加して

せたな町立明和小学校

教頭 佐々木 朗

1. 概略

日時 平成24年9月21日

場所 檜山合同調査4階講堂

参加者 管内小・中・高等学校教員23名

講師 奥尻島津波語り部隊 佐藤 認先生

北海道檜山振興局地域制作部地域政策課主

査 大谷 聡先生

内容

(1) 説明(全体会)

「管内における安全教育、安全管理の現状と課題」

(2) 講義(全体会)

「実践的、効果的な安全教育の進め方」(防災)

(3) 実践発表(全体会)

「児童生徒等の安全を守る学校(園)の取組一交通安全、防犯、防災の3領域について一」

(4) 研究協議(部会別:交通安全、防犯、防災の3部会を構成する)

・テーマ「事件、事故、災害から児童生徒を守る地域ぐるみの取組の推進」

2. 内容のまとめ

(1) 管内における安全教育、安全管理の現状と課題

・学校保健法が、学校保健安全法に変わり、各学校で保健計画と別に、安全計画も作る事となった。

・交通事故について、平成23年度の児童生徒の死者数は5名で、歩行中が2名となっている。

・管内における児童生徒対象の防犯訓練などの実施は小学校では80%、中学校では54%となっている。本年度まで100%を目指している。

・災害安全に関する充実のために、①各学校や地域の実情に応じた避難訓練の実施(地震・津波への対策)、②発達段階を考慮した防災教育の充実、③総合的な学習の時間を活用した防災教育の実施(防災マップの作成等)、④家庭や地域との一層の連携、⑤避難所としての学校の施設・設備の充実と教職員の役割の明確化

(2) 奥尻の発表

講師 佐藤認先生(奥尻町観光協会)

北海道南西沖地震は1993年7月12日午後10時17分に発生した。震源地は、寿都沖で深さは34kmでごく浅い。マグニチュードは7.8。震度は6。但し奥尻には地震計がなく体感ではもっとあったとのこと。

地震時は立ってられない揺れ。消防団だった佐藤さんは興味半分で、町(奥尻)へでると、洋々荘が土砂崩れで埋まり、中からうめき声がする。また、島の石油備蓄タンクから油が流れ出ている。とにかく、人助けをする一方、油に引火しないように水をかけ続けた。一晩経って夜が明けると、

崖崩れの様子が生々しくわかり、一層恐怖が強くなる。

一方青苗地区は、ものすごい津波で、今の津波科学館がある辺り一面が流された。さらには、青苗港にいた工事用の台船の綱が切れ、その巨大な船が町を破壊するのを手伝った。そしてさらに青苗の北部では火災が発生した。灯油タンクから漏れた油に引火したものだろうと考えられる。消防が出たが、手を付けられず、自然鎮火を待つしかなかった。

その後佐藤さんは、北部の捜索に携わったが、発見されたのは全て遺体で生存者はいなかった。海岸線の捜索は長い間行われた。毎日遺体が打ち寄せられた。島で一番高く津波が押し寄せられたのは、北部で23.3メートル。それより下は草が生えず、はっきり境目がわかった。

今復興を終えて、防災学習の推進に取り組んでいる。修学旅行の学生には救援救助の訓練に取り組ませている。災害本部や公務員、消防団、医師などの係を全て子どもたちに任せている。また、炊き出しの訓練も行って、年々その数も増えている。また、語り部隊として、生の体験を語る事業も行っており、謝礼はいらす、また、旅費も奥尻町で出してくれるものがある。全国から招きを待っている。

また、島の教訓を後世に伝える事を目的とした奥尻津波館は、被害の状況、津波のメカニズムを知る事ができる。また、人の住む地域には11メートルの防潮堤を作ったり、津波水門を作ったりの備えもしている。学校も津波を回避しやすいように1階を空洞（ピロティ）として、2階からの校舎としている。

質問コーナーでは、防災に関しての観光収入が増えている。また、外国からの視察も来ている。見舞いを送るのは、一番に必要なとしているものは衣服である。お金もいいが、なかなか被災者に届かないというのがある。

(3) 檜山支庁地域制作部地域政策課主査大谷聡の話

何かあったら鳴るといふ災害用携帯電話。北海道危機管理局からの情報を受け、北海道警察函館方面本部、陸上自衛隊函館駐屯地、函館海上保安部、函館海洋気象台、各市町村、下線・道路の管理者にすぐに連絡を取るという。ここが檜山の危機管理の中心となっている。

情報として、北海道の災害情報をメールで受けることができるシステムがある。newentry@mail.bousai-hokkaido.jp へ空メールを送ると、希望の情報の種類（地震と気象警報など）と場所（乙部町だけとか、檜山全体とか）を選択することができる。随時情報が届く。

(4) 河北小学校/上ノ国高校・大成中学校の発表

河北小学校は全校児童にヘルメットを着用させて、通学させている。上ノ国高校は、小学校、中学校が連携しての交通安全啓発活動をしている。大成中は、津波襲来時の避難について報告があった。

(5) 各部会（防災部会に参加）

東日本大震災があつてからは、どの学校でも津波の訓練を行っている。その中で、避難場所に苦勞している。道なき道を駆け上がるとか、距離が結構あるとか、課題も多い。また、学校が避難所となつた場合でも、毛布や食料品は現実として学校にない。

これらをどうクリアしていくか。また東日本大震災の時は、子どもたちの下校時刻の少し前であった。津波注意報が出て、帰すか、学校に待機させるか、向かいに来てもらうか結構、どの学校でも悩んだようである。

3. 感想

普段子どもたちの安全には十分配慮しているとは思っているが、改めて一日この課題を考えてみると、様々な解決していかなければならない課題があることがわかった。と同時に全ての課題をクリアし、100%の安全を確保することも不可能であることもわかる。

交通安全については、小さい時にルールをしっかりと教えることが大切である。人が見ていようと見ていまいと、ルールをきちんと守る。子どもたちは未来のドライバーであることを考え、正しい知識を教えていきたい。取り締まりをしているからスピードを出さないとか、この時間には絶対警察はいないとか、そういう考えでは、交通事故は撲滅することは難しいと思う。

防犯については、これも訓練が必要なのであろう。不審車に声をかけられるとか、学校の中に凶悪犯が入ってくるとか、どうしてこんな世の中になったのかと思うけれども、子どもたちの安全を守るためには必要な訓練なのであろうということで、納得するしかない。

防災については、奥尻の話が生々しかっ

た。大津波警報が発令されても、避難しようとする人の割合がかなり高いという報道もあった。痛い目に遭わないとわからなというのも確かにあるが、このような話に多く触れることによって、万が一の時、判断を間違わないようにしなければならなし、子どもたちにも、いつどこで遭うかわからない災害を甘く見ないように指導していくことが大切だと考えた。

4年前に、日帰りで奥尻の旅で出た。島について、軽四のレンタカーを借りて島を巡った。青苗地区は、新しい建物ばかりであった。夏の暑い日、ふっとパスということで、奥尻空港をぐるっと一周歩いた。津波の跡は感じることはなかったが、最後に訪れた津波館は印象が強烈であった。きれいな公園になっていたが、以前は、たくさんの方の暮らしが、生活があった場所が一瞬にして、水の中に、そして火の中になってしまい、多くの命が奪われたということがわかった。島の滞在時間5時間ぐらいの小さな旅ではあったが、奥尻の方の復興に対する思いや、力、悲しみを乗り越えた姿を知る事ができた。

昨年の東日本大震災での津波があつて、多くの学校で津波に備えての訓練はした。ただい、災害は津波だけではない。雪、洪水、台風、竜巻など自然災害だけでも他にもある。人間、自然には勝てない。どうやって自分の身を守るか、被害を少なくするか改めて考えるいい機会となった。